
一般化線形モデルを Excelで極め活用する

BioStat研究所(株)
高橋 行雄

プロビット変換による LD_{50}

- ◆ 二値の用量反応の実験データからプロビット変換を使って50%致死量 LD_{50} と95%信頼区間を求めています。反復重み付き回帰による最尤法で行なっています。
- ◆ ロジット変換の場合の計算方法を教えてもらえませんか？
- ◆ 低用量から反応が出る場合の LD_{10} の推定には、補2重対数変換がいいと言われています。どのように計算したらよいのですか？

プロビット・ロジット・補2重対数

- ◆ LD_{50} の信頼区間の計算に、佐久間(1977), 薬効評価－計画と解析 I, p335 に示されている Fiellerの式を用いて計算しています.
- ◆ ロジット変換を用いた場合にも計算できるようにしたいのです. どうしたらよいのでしょうか?
- ◆ 補2重対数変換(最小極値分布)による LD_{10} の推定と95%信頼区間の場合も教えて頂けませんか?

さて困った

- ◆ SAS/PROBITを使えば全て計算ができるのだが、持っていないと言う.
- ◆ ロジット変換の場合であれば、JMPのロジスティック回帰の逆推定を用いて計算はできるが、プロビット変換と補2重対数変換については、どうしたらよいのだろうか.
- ◆ 田中ら訳(2008)「一般化線形モデル入門」では、どのような説明があるのだろうか.

「一般化線形モデル入門」

- ◆ 反復重み付き回帰による最尤法が丁寧に書いてある。例示はポアソン回帰の場合だけで、プロビット・ロジット・補2重対数の例示はない。
- ◆ 反復に際しての重みの行列 W の計算式、変換値 z の計算式が示されているので、これを使えば何とかかなりそうだ。

Excel による反復重み付き回帰

- ◆ 吉村功編著(1987), 毒性・薬効データの統計解析: 226-32, に示されている例でプロビット変換による反復重み付き回帰を Excel に実行してみよう.
- ◆ 残念ながら Excel には重み付き回帰の関数がないので, 行列関数を使うしかない.
- ◆ 重み W は行列の対角要素なので, 扱いにくいので, 縦ベクトル w とし, X の列ごとに w を掛けて $X^T W = (X * w)^T$ として計算しよう.

プロビット変換での補正值 z と重み w

プロビット変換

リンク関数 $g(\mu_i) = \Phi^{-1}(\mu_i) + 5 = \mathbf{x}^T \boldsymbol{\beta} = \eta_i$

補正值 z_i
$$z_i = \eta_i + (y_i - \mu_i) \left(\frac{\partial \eta_i}{\partial \mu_i} \right) = \eta_i + \frac{(y_i - \mu_i)}{\phi(\eta_i - 5)}$$

重み w_{ii}
$$w_{ii} = \frac{1}{\text{var}(Y_i)} \left(\frac{\partial \mu_i}{\partial \eta_i} \right)^2 = \frac{n_i [\phi(\eta_i - 5)]^2}{\mu_i (1 - \mu_i)}$$

Excel による反復重み付き回帰

	用量	切片	対数 <i>dose</i>	出現 数	例数	出現 率	probit 変換		回帰 推定値	出現率 推定値	補正 probit	重み	更新 推定値	10) 差
<i>i</i>	<i>dose</i>	<i>x</i> ₀	<i>x</i> ₁	<i>r</i>	<i>n</i>	<i>y</i>	<i>z</i> [*]		3) $\eta^{(1)}$	μ	4) <i>z</i>	5) <i>w</i>	9) $\eta^{(2)}$	$\eta^{(1)}-\eta^{(2)}$
1	101	1	2.004	0	10	0.000	-		3.522	0.070	3.001	2.762	3.253	0.270
2	136	1	2.134	2	10	0.200	4.158		4.241	0.224	4.161	5.146	4.081	0.160
3	183	1	2.262	5	10	0.500	5.000		4.957	0.483	5.000	6.362	4.907	0.050
4	247	1	2.393	8	10	0.800	5.842		5.681	0.752	5.833	5.367	5.743	-0.061
5	333	1	2.522	9	10	0.900	6.282		6.403	0.920	6.271	3.011	6.574	-0.172
6	450	1	2.653	10	10	1.000	-		7.130	0.983	7.531	1.045	7.413	-0.283
		<i>X</i> デザイン行列		1) Intercept()=		-7.621	$\beta_0^{\wedge}=$	-7.621	8) 更新 $\beta_0^{\wedge}=$		-9.598	2.1E-01		
				Slope()=		5.559	$\beta_1^{\wedge}=$	5.559			$\beta_1^{\wedge}=$	6.411	平方和	
				回帰係数 初期値			2) 係数・貼付		$(X^T W X)^{-1} X^T W z$					
				6)		23.69 54.12	6)		7.363 -3.205	7)		119.58		
						54.12 124.34			-3.205 1.403			277.70		
				$X^T W X$			$(X^T W X)^{-1}$			$X^T W z$				

表1. 初期値を貼付け, 更新パラメータの貼付けを繰り返す. 5サイクル目で表示桁数で一致する.

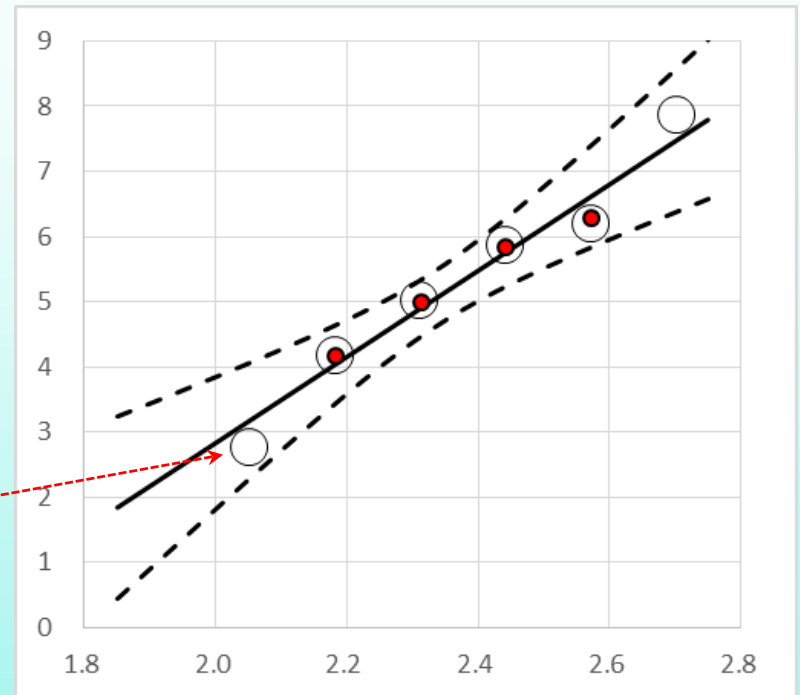
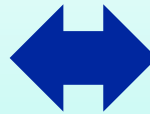
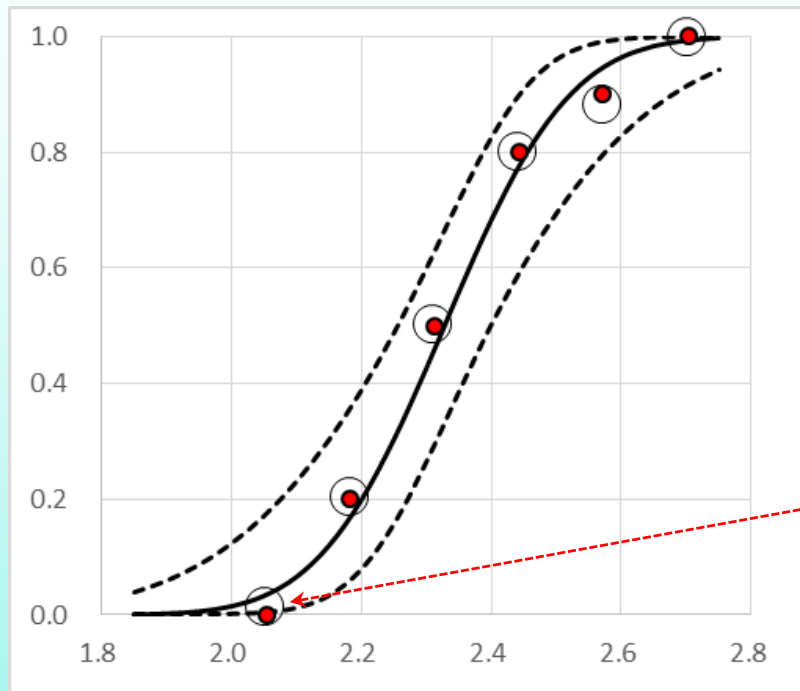
95%信頼区間

- ◆ プロビット変換に対する回帰パラメータが推定できたので、回帰直線の推定値の分散をデルタ法で求め、95%信頼区間を計算しグラフ上に描く.

var(x_i) =	1	10.321	-4.498	1	x_i
	x_i	-4.498	1.970		
	x^T	$(X^T W X)^{-1}$		x	

- ◆ プロビット変換の逆変換で、シグモイド曲線に対する95%信頼区間も描く.

シグモイド曲線 vs プロビット変換



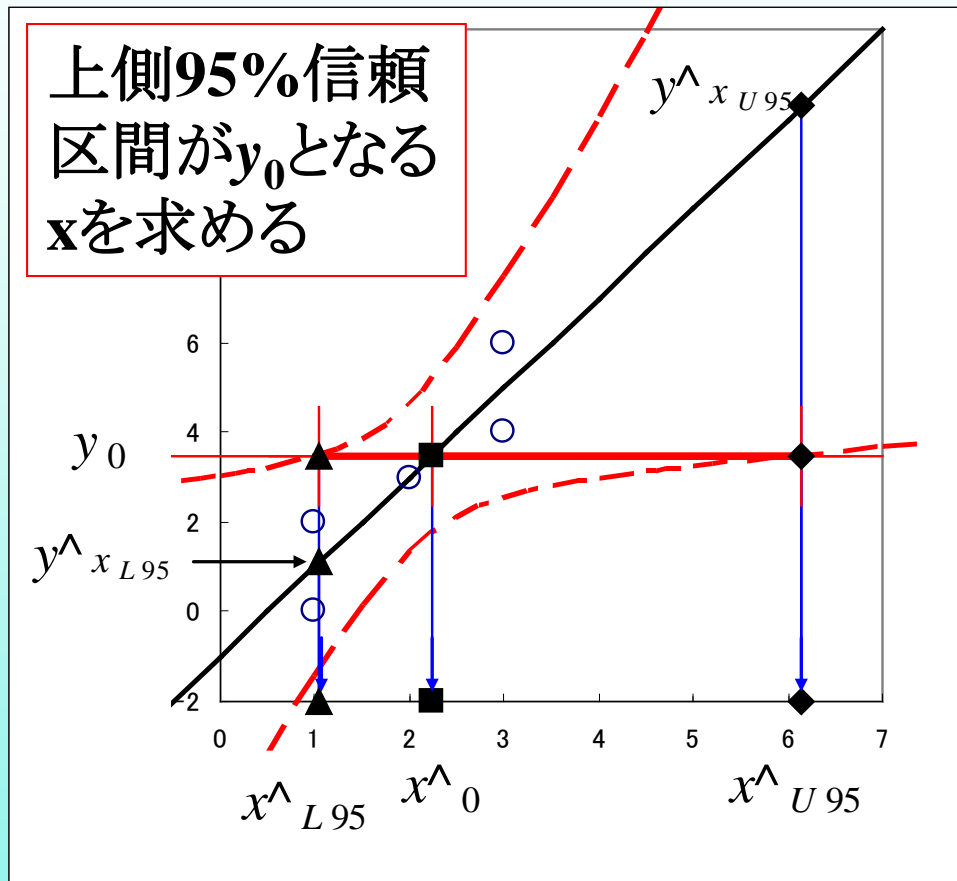
● は観測された死亡率. ○ はプロビット変換の補正值. 0%と100%はプロビット変換ができないので ● が表示されない. ● と○がわずかに乖離していることが見いだされる.

LD_{50} の推定と近似95%信頼区間

1) Intercept()=	-7.621	$\beta_0^{\wedge} =$	-10.070	8) 更新 $\beta_0^{\wedge} =$	-10.070	8.2E-11
Slope()=	5.559	$\beta_1^{\wedge} =$	6.615	$\beta_1^{\wedge} =$	6.615	平方和
回帰係数 初期値		2) 係数・貼付		$(X^T W X)^{-1} X^T W z$		
6)	20.64 47.13	6)	10.320 -4.498	7)	103.94	
	47.13 108.13		-4.498 1.970		240.72	
	$X^T W X$		$(X^T W X)^{-1}$		$X^T W z$	
$(5 - \beta_0^{\wedge}) / \beta_1^{\wedge}$	偏微分式	d	$d^T (X^T W X)^{-1} d$	対数	$dose$	
対数 $LD_{50} =$	2.278	$d_0 = -1 / \beta_1^{\wedge} =$	-0.151	$Var =$	0.0011	L95% = 2.213 163.3
$LD_{50} =$	189.7	$(5 - \beta_0^{\wedge}) / \beta_1^{\wedge 2} =$	-0.344	$SE =$	0.0333	U95% = 2.343 220.5

表2. 分散共分散行列 $(X^T W X)^{-1}$ を用いたデルタ法で計算したSEから95%信頼区間を計算する.

正確な信頼区間 模式図



- ◆ 重み付き回帰でも逆推定値の正確な信頼区間は、単回帰分析の場合と同じである.
- ◆ 竹内啓(1963)数理統計学, 312-315.
- ◆ 反応の推定値の95%信頼区間は推定反応に対して上下で対称だが、逆推定の場合は、用量についての推定なので95%信頼区間は左右で非対称になる.

LD_{10} の正確な95%信頼区間

26.840	-15.082
-15.082	8.481
I^{-1} 分散共分散	

$$Var(\hat{\beta}_0) = 26.840$$

$$Var(\hat{\beta}_1) = 8.481$$

$$Cov(\hat{\beta}_0, \hat{\beta}_1) = -15.082$$

$$t_{\alpha} = 1.96$$

2次式の
解の公式

$p_0 =$	0.10	$\eta_0 =$	-2.197	$LD_{p_0} =$	1.708	$L_{95\%} =$	1.691	$\hat{x}_{L95} = \frac{-b \pm \sqrt{b^2 - 4ac}}{2c}$
$a =$	-864.6	$b =$	1013.9	$c =$	-297.2	$U_{95\%} =$	1.720	

$$\underbrace{\left[Var(\hat{\beta}_0) - \frac{(\eta_0 - \hat{\beta}_0)^2}{t_{\alpha}^2} \right]}_a + \underbrace{\left[2Cov(\hat{\beta}_0, \hat{\beta}_1) + \frac{2(\eta_0 - \hat{\beta}_0)\hat{\beta}_1}{t_{\alpha}^2} \right]}_b \hat{x}_{L95} + \underbrace{\left[Var(\hat{\beta}_1) - \frac{\hat{\beta}_1^2}{t_{\alpha}^2} \right]}_c \hat{x}_{L95}^2 = 0$$

注) LD_{50} などの95%信頼区間

- ◆ LD_{50} など逆推定の95%信頼区間を求めるために、伝統的に「Fiellerの式」が使われている.
- ◆ 「Fiellerの式」は、 LD_{50} が回帰係数の比によって推定されることから、比の正確な信頼区間を推定する式である.
- ◆ LD_{50} が回帰直線の95%信頼区間を横切るときの 用量 x から推定しても、同じ式に帰着する.

ロジット変換での重み付き回帰

リンク関数から補正值 z と 重み w の計算式を求める

ロジット変換

リンク関数 $g(\mu_i) = \log[\mu_i / (1 - \mu_i)] = \mathbf{x}^T \boldsymbol{\beta} = \eta_i$

補正值 z_i
$$z_i = \eta_i + (y_i - \mu_i) \left(\frac{\partial \eta_i}{\partial \mu_i} \right) = \eta_i + \frac{y_i - \mu_i}{\mu_i(1 - \mu_i)}$$

重み w_{ii}
$$w_{ii} = \frac{1}{\text{var}(Y_i)} \left(\frac{\partial \mu_i}{\partial \eta_i} \right)^2 = \frac{n_i [\mu_i(1 - \mu_i)]^2}{\mu_i(1 - \mu_i)}$$

□ がプロビットと異なる.

補2重対数変換での重み付き回帰

リンク関数から補正值 z と 重み w の計算式を求める

リンク関数 $g(\mu) = \ln[-\ln(1 - \mu)] = \beta_0 + \beta_1 x = \eta$

補正值 z_i
$$z_i = \eta_i + \frac{y_i - \mu_i}{-\ln(1 - \mu_i)(1 - \mu_i)}$$

重み w_{ii}
$$w_{ii} = \frac{n_i [-\ln(1 - \mu_i)(1 - \mu_i)]^2}{\mu_i (1 - \mu_i)}$$

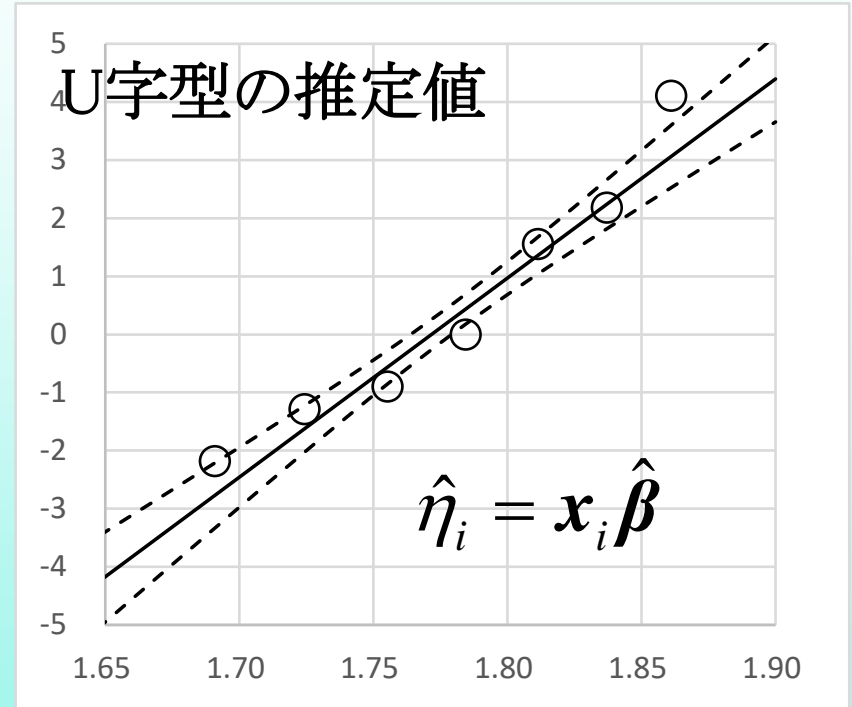
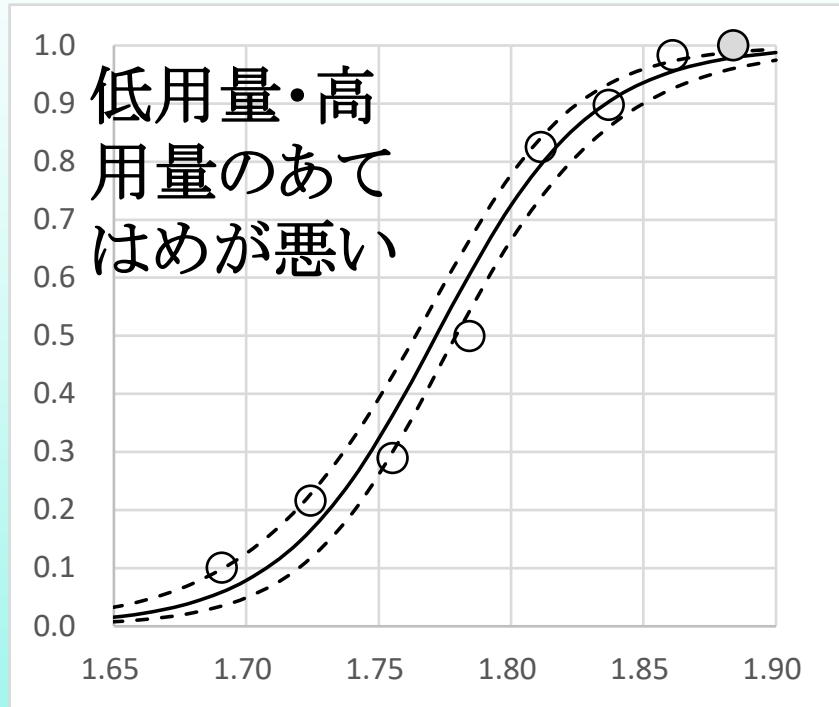
情報行列を用いた最尤法

- ◆ 反復重み付き回帰は分かったが、他の計算方法はないのだろうか.
- ◆ 最近是最尤法が一般に用いられているが、どのように実施すればいいのだろうか.
- ◆ 田中ら訳(2008),「一般化線形モデル入門」, 第7.3節 用量反応モデル 表7.2 カブト虫の死亡データを例として, ロジット変換と補2重対数変換についてExcelで計算してみよう.

情報行列を用いたロジット法 初期値

	対数	死亡数	合計	出現率	推定値	対数尤度	行列 U の要素		情報行列 I の要素			
i	用量 x_i	y_i	n_i	p_i	π_i	$\ln(L_i)$	U_{i1}	U_{i2}	I_{i11}	I_{i12}	I_{i21}	I_{i22}
1	1.6907	6	59	0.102	0.500	-40.896	-23.500	-39.731	14.750	24.938	24.938	42.162
2	1.7242	13	60	0.217	0.500	-41.589	-17.000	-29.311	15.000	25.863	25.863	44.593
3	1.7552	18	62	0.290	0.500	-42.975	-13.000	-22.818	15.500	27.206	27.206	47.751
4	1.7842	28	56	0.500	0.500	-38.816	0.000	0.000	14.000	24.979	24.979	44.567
5	1.8113	52	63	0.825	0.500	-43.668	20.500	37.132	15.750	28.528	28.528	51.673
6	1.8369	53	59	0.898	0.500	-40.896	23.500	43.167	14.750	27.094	27.094	49.769
7	1.8610	61	62	0.984	0.500	-42.975	30.000	55.830	15.500	28.846	28.846	53.681
8	1.8839	60	60	1.000	0.500	-41.589	30.000	56.517	15.000	28.259	28.259	53.236
					$\ln L =$	-333.40	50.500	100.785	120.25	215.71	215.71	387.43
		切片 $\beta_0 \hat{=}$		0.000	-37.856	-37.856		50.500	120.25	215.71	6.743	-3.754
		傾き $\beta_1 \hat{=}$		0.000	21.337	21.337		100.785	215.71	387.43	-3.754	2.093
				$\beta^{(m-1)} + [I^{(m-1)}]^{-1} U^{(m-1)} = \beta^{(m)}$				$U^{(m-1)}$	$I^{(m-1)}$	I^{-1} 分散共分散		

ロジット変換での95%信頼区間



$$\pi_i = 1 / [1 + \exp(-\eta_i)]$$

$$\text{Var}(\eta_i) = \mathbf{x}_i \mathbf{I}^{-1} \mathbf{x}_i^T$$

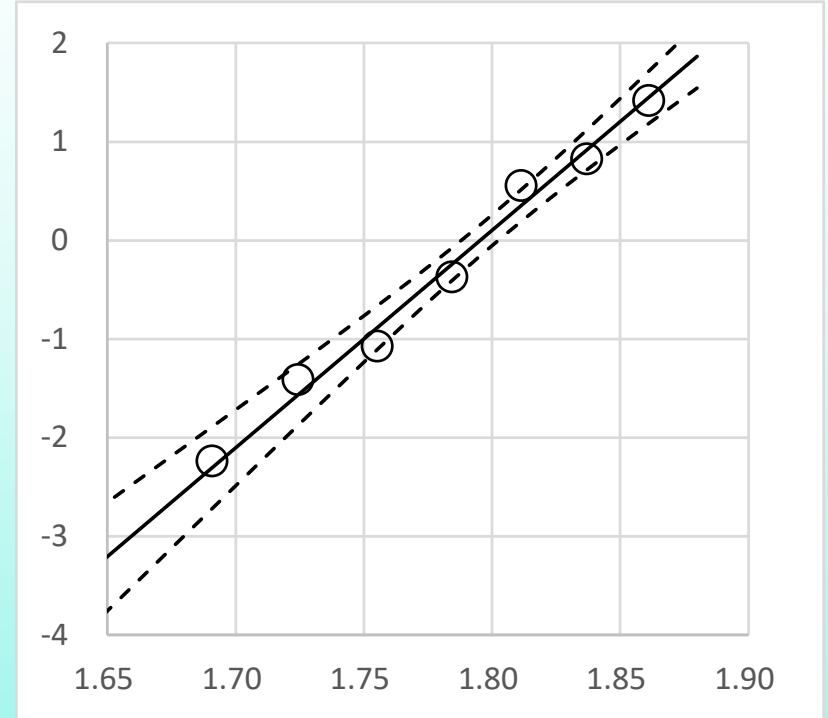
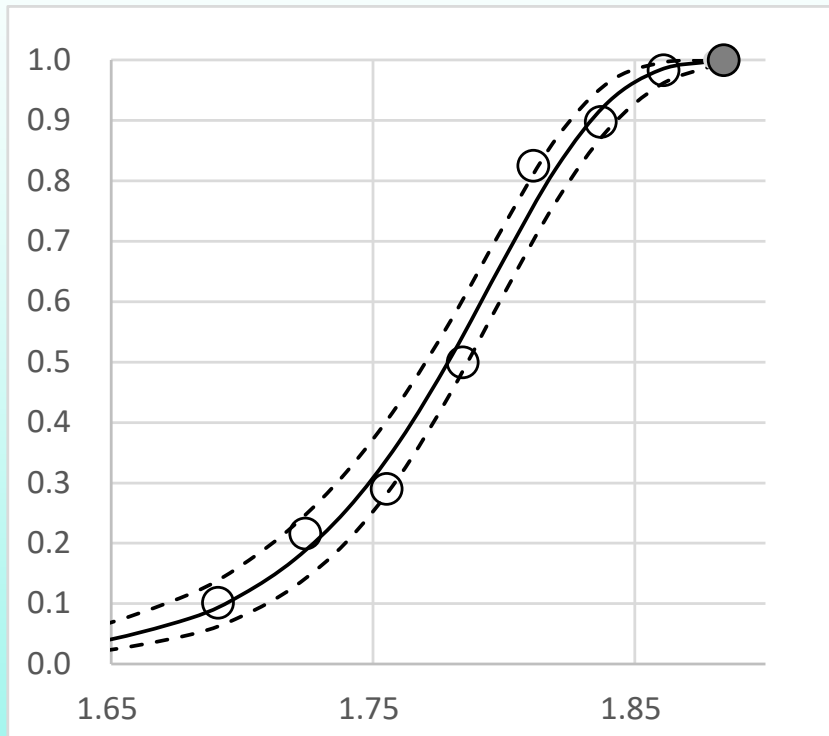
ロジット変換後の推定値が回帰直線に対してU型に分布しており、当てはめが良いとはいえない

補2重対数変換でのあてはめ

	対数	死亡 数	合計	出現率	推定値	対数 尤度		行列 \boldsymbol{U} の要素		行列 \boldsymbol{I} の要素			
i	用量 x	y_i	n_i	p_i	π_i^\wedge	$\ln(L_i)$	z_i	U_{i1}	U_{i2}	I_{i11}	I_{i12}	I_{i21}	I_{i22}
1	1.6907	6	59	0.102	0.095	-19.415	0.100	0.431	0.729	5.564	9.407	9.407	15.904
2	1.7242	13	60	0.217	0.188	-31.515	0.208	1.904	3.284	11.049	19.050	19.050	32.846
3	1.7552	18	62	0.290	0.338	-37.674	0.412	-3.605	-6.328	21.352	37.478	37.478	65.781
4	1.7842	28	56	0.500	0.542	-39.017	0.782	-3.415	-6.093	30.032	53.583	53.583	95.603
5	1.8113	52	63	0.825	0.758	-30.007	1.420	7.910	14.328	36.164	65.504	65.504	118.648
6	1.8369	53	59	0.898	0.918	-19.536	2.497	-3.109	-5.711	35.417	65.057	65.057	119.503
7	1.8610	61	62	0.984	0.986	-5.126	4.247	-0.488	-0.908	16.687	31.054	31.054	57.791
8	1.8839	60	60	1.000	0.999	-0.053	7.036	0.372	0.700	2.246	4.231	4.231	7.970
					和 $\ln L =$	-182.343		0.000	0.000	158.51	285.36	285.36	514.05
		切片 $\beta_0^\wedge =$		-39.572	0.000	-39.572			0.000	158.51	285.36	10.427	-5.788
		傾き $\beta_1^\wedge =$		22.041	0.000	22.041			0.000	285.36	514.05	-5.788	3.215
		$\boldsymbol{\beta}^{(m-1)} \left[\boldsymbol{H}^{(m-1)} \right]^{-1} \boldsymbol{U}^{(m-1)} \boldsymbol{\beta}^{(m)}$						\boldsymbol{U}		\boldsymbol{I}	\boldsymbol{I}^{-1} 分散共分散		
		$p_0 =$	0.10		$\eta_0 =$	-2.250	$LD_{p_0} =$	1.693	$L95\% =$	1.672	$\hat{x}_{L95} = \frac{-b \pm \sqrt{b^2 - 4ac}}{2c}$		
		$a =$	-352.2		$b =$	416.7	$c =$	-123.2	$U95\% =$	1.709			

スコア行列 U および 情報行列 I の計算式を
補2重対数の式にかえるだけで, 他はプロビット・ロジットの場合と全く同じである.

補2重対数変換 95%信頼区間



推定シグモイド曲線および直線の
上下に推定値がバランスよく分布している。

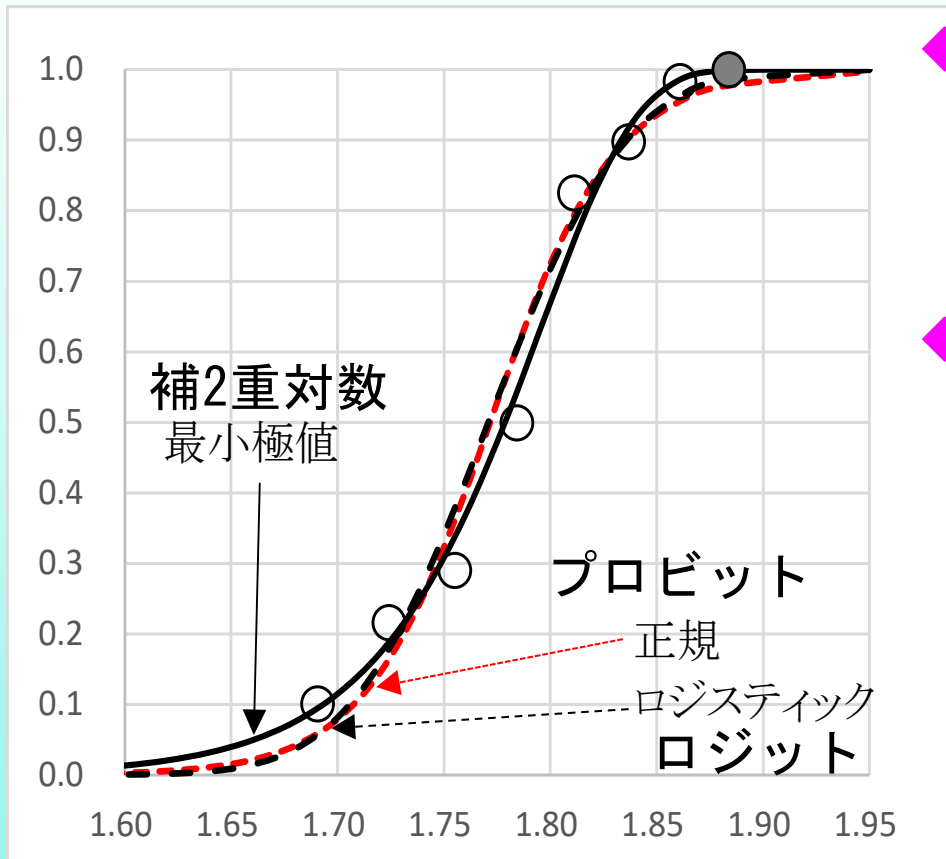
ロジット・プロビット・補2重対数

					ロジット		プロビット		補2重対数	
	対数	死亡数	合計	出現率	推定値	対数尤度	推定値	対数尤度	推定値	対数尤度
i	用量 x	y_i	n_i	p	π_i^{\wedge}	$\ln(L_i)$	π_i^{\wedge}	$\ln(L_i)$	π_i^{\wedge}	$\ln(L_i)$
1	1.6907	6	59	0.102	0.059	-20.222	0.057	-20.303	0.095	-19.415
2	1.7242	13	60	0.217	0.164	-31.921	0.179	-31.639	0.188	-31.515
3	1.7552	18	62	0.290	0.362	-38.067	0.379	-38.421	0.338	-37.674
4	1.7842	28	56	0.500	0.605	-40.087	0.604	-40.051	0.542	-39.018
5	1.8113	52	63	0.825	0.795	-29.360	0.788	-29.459	0.758	-30.006
6	1.8369	53	59	0.898	0.903	-19.407	0.904	-19.408	0.918	-19.536
7	1.8610	61	62	0.984	0.955	-5.902	0.962	-5.621	0.986	-5.126
8	1.8839	60	60	1.000	0.979	-1.270	0.987	-0.777	0.999	-0.053
					和 $\ln L =$	-186.235	和 $\ln L =$	-185.679	和 $\ln L =$	-182.343
					切片 $\beta_0^{\wedge} =$	-60.716	$\mu^{\wedge} =$	1.771	$\mu^{\wedge} =$	1.795
					傾き $\beta_1^{\wedge} =$	34.270	$\sigma^{\wedge} =$	0.051	$\sigma^{\wedge} =$	0.045

Excelソルバーにより、対数尤度を最大化した。

補2重対数変換(最小極値分布)のあてはめが最もよいことは、参考文献の表7.4に示されている

3種のモデルの比較



- ◆ 補2重対数変換(最小極値分布)のあてはめが最もフィットしている。
- ◆ ロジット変換(ロジスティック分布)のほうがプロビット変換(正規分布)に対してわずかに立ち上がっている。

まとめ

- ◆ 一般線形モデル関連の教科書は統計ソフトの使い方のマニュアル的になっており, LD_{50} のような実用上の諸問題については言及されていない.
- ◆ 一般化線形モデル(GLIM)で用いられる反復重み付き回帰および情報行列を用いた最尤法の計算過程を, Excelで実施できるようにした.
- ◆ プロビット, ロジット, 補2重対数など種々の変換に対応でき, 応用力の向上が期待される.